れに由りて大将軍招撫恤綏して人民始めて安し。既にして功を成して凱旋し、細さに他の奇謀を疏して聖聽に上達し、深く以て褒嘉す。其の子孫の家、世〻君南風職に任じ、而して彼の肥良志屋の地を拝授す。

6.『錢姓家譜正統』

琉球王国側の『錢姓家譜正統』（真境名安興　県史編纂史料那覇之部）の「一世直張　安波根里主」の項には次のように記載されている（原文の読点は筆者）。

【原文】

錢姓家譜　正統

紀　録

一世直張　安波根里主

童名真五郎、唐名錢原、成化十五年戊戌[ママ]生

父兼城間切阿波根村鹽間

母不知為何人女

室錢氏儀間親雲上錢廣女真伊奴金　生日不傳　嘉靖十九年己亥[ママ]九月八日

死号亘

長男直方

尚真王世代

球陽之轄地宮古・八重山二嶋、於　先王察度朝始来貢以来毎歳朝貢無怠盡嘉奬恭順之誠故、毎属嶋酋長三員授官職受理島事、且及人物凋謝島之酋長替換其職、到此八重山嶋有逆心悪人起謀叛、先将攻宮古嶋、故從宮古嶋有捷報告于王都、因

尚真聖主有逆鱗、将為逆徒征罰任安波根里主九番将率士卒三千、弘治十三年庚申二月二日、擇吉日従那覇港開船、即日到于馬歯山、五日從馬歯山開洋、到姑米山、十二日開洋、自宮古嶋到于八重山嶋、征伐凶徒官軍進勇而以謀討逆黨、且於石垣在家放火煙下切臥突伏其勢如破竹、時老翁一人軍降于軍門由是保里川原赤蜂在處無所隠故為助身命延首盡□誠因此凱歌班師回国復命也

嘉靖二十二年癸卯二月三日不禄、寿六十六、号恵照

【要約】

銭姓家譜　正統（大宗家）

紀　録

一世直張　安波根里主。

童名は真五郎、唐名は銭原、成化十五年戊戌（「成化十五年」は己亥で一四七九年、「戊戌」は成化十四年で一四七八年）生。

父は兼城間切阿波根村（現糸満市）の塩間。

母は何人の娘たるか知れず。

室は銭姓儀間親雲上銭広の娘真伊奴金。生まれた日は伝わらず、嘉靖十九年己亥（「嘉靖十九年」は庚子で一五四

〇年、「己亥」は嘉靖十八年で一五三九年）九月八日に死す、号は亘。

長男は直方。

尚真王の世代（一四七七～一五二六年）。

琉球の支配する地である宮古・八重山の二島は、先王の察度王代（一三五〇～九五年）に来貢（一三九〇年・宮古、八重山の中山入貢）して以来、毎年朝貢して怠けることなく、喜んで恭順の誠をほめ、属島ごとに（宮古・八重山にそれぞれ）酋長三人に官職を授けて島事を管理させた。かつ、人物がおとろえて去ったので（あるいは、死んだので）、島の酋長の職をかえた。ここにいたり、八重山島に逆心の悪人ありて謀叛を起こし、まず宮古島を攻めた。宮古島より戦勝の報告が首里にあり、

尚真王の逆鱗にふれ、王は逆徒征伐のために安波根里主を九番の将に任じた。銭原は、士卒三千を率いて、弘治十三（一五〇〇）年二月二日吉日を選んで那覇港を出航、即日慶良間に到り、五日に慶良間を出航して久米島に到り、十二日に出航、宮古島より八重山島に到る。凶徒を征伐べく官軍は進勇してはからいをもって逆党を討ち、石垣の在家に放火し、（逆党は）その煙の下にたおれた。その勢いは破竹のごとし。時に老翁一人が軍門にくだり、これは保里川原赤蜂の在所であることから、隠れる所なきゆえ、身命を助けるために「首尽」を延べて誠を□す。これにより凱歌をあげ（戦に勝ち）、国帰りて復命するなり。

嘉靖二十二（一五四三）年二月三日に亡くなり、享年六十六歳、号は恵照。

各史料旧記から当時のいきさつを推察すると、おおよそ次のようになる。

宮古・八重山は一三九〇年、琉球王国に入貢以来、恭順する態度をとっていた。琉球王国への入貢の負担が厳しいた

め、ついに入貢のやり方に不満を抱いた大浜村のオヤケアカハチ・ホンカワラは謀反を企て、貢物を三年間止め、他の酋長らに自分に従うようにと呼びかけた。石垣島の那礼当・那礼重利、（仲間満慶山）、波照間島の明宇底獅子嘉殿らはアカハチらに従わなかったために殺された。

こうして琉球王国への反旗を揚げ、大浜、石垣島の南海岸、北海岸、波照間島へ勢力を拡大する中で、アカハチらは宮古島を攻めた。これを知った琉球王国の尚真王は逆鱗し、大里大将はじめ銭原副大将ら九人の武将に命じ三千余人・大小四十六隻の大船団を組み、一五〇〇年二月二日吉日を選んで那覇港を出港、その日のうちに慶良間に至り、五日に慶良間を出航して久米島に至り、十二日に出航、宮古島の仲宗根豊見親玄雅を先導に任じ、多良間島の土原豊見親春源を水先案内にして、宮古島から八重山に至った。

この時、久米島の神と八重山の神とは姉妹であるので、久米島の君南風が従軍したならば八重山の神は信服するだろうとの神託があったので、君南風のほか宮古の砂川の姉妹など祝女十数人が従軍した。これに長田大翁主も加わった。アカハチらは北を険岨に負い、南も大海に面した要塞に防備を固めていた。数十人の呪力をもった神女らによって、奇声の大声による呪い合戦が繰り広げられた。この呪い合戦でも両軍引けを取らない膠着状態が続いた。

王国軍の久米島神女チンペエ（君南風）に奇策の託宣があった。早速王国軍は、いかだを作り、竹や木を乗せて火を放ち、夜中に流す陽動作戦にでた。この陽動作戦によってオヤケアカハチらは、惑わされて火の流れる方に兵を動かしたすきに、王国軍は二手に分かれ一隊は登野城方面から、他の一隊も新川方面から上陸し攻めた。この陽動作戦や奇襲攻撃によりオヤケアカハチらは大敗し、家々は放火され、オヤケアカハチ・ホンカワラは捕らえられて処刑された。